

フィヒテ
初代公選学長
ベルリン大学の栄光 第2部
ドイツ アカデミック街道を歩く 丹野義彦（東京大学名誉教授）

ドイツ アカデミック街道を歩く

大学散歩の面白さを伝えるために、私はアカデミックツアーとして、ロンドン編、アメリカ編、イギリス編、イタリア編の4部作を刊行してきた（星和書店および有斐閣）。これからドイツ編をお届けしたい。私はこれを「ドイツ・アカデミック街道」と名前をつけた。ハイデルベルクとライプツィヒ、ミュンヘンの次は、ベルリンをとりあげる。ベルリンほど奥が深く面白い都市はない。

まず、ベルリン大学の歴史について5つに分けて述べる。本論はその第2部にあたる。

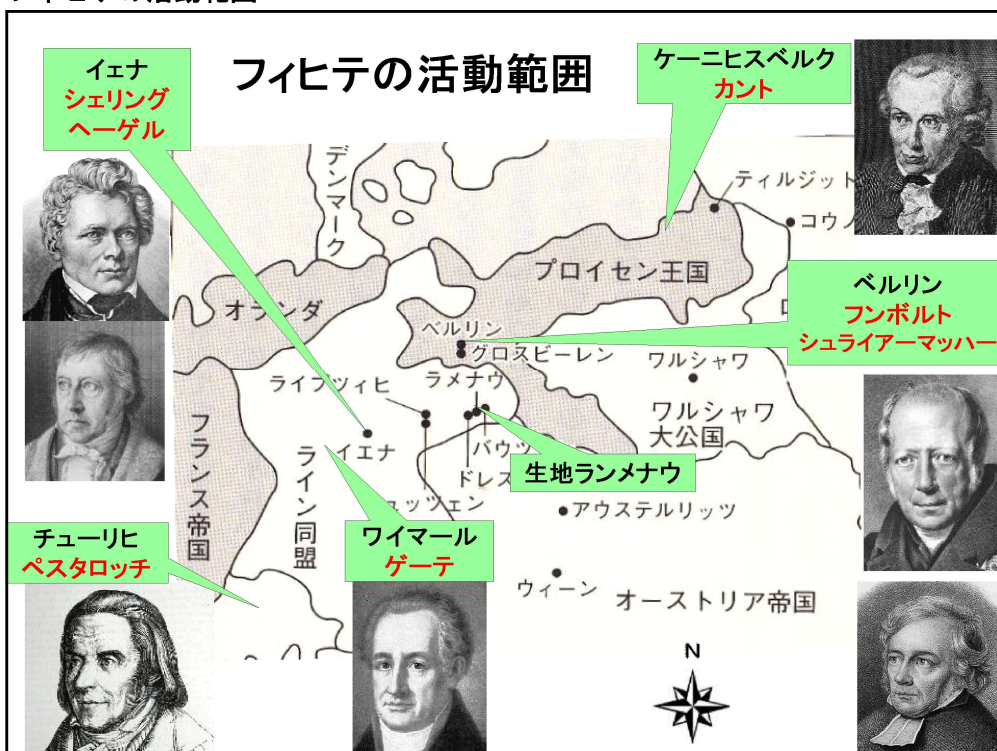
| |
|--|
| ◆ベルリン大学の栄光 |
| 第1部 創立の謎 フンボルト理念のウソとシュライアマハー |
| 第2部 フィヒテ 初代公選学長 |
| 第3部 シェリング ドイツ観念論哲学の要 |
| 第4部 ブラック・ヘーゲル入門 隠蔽された哲学者の恋 |
| 第5部 プロレスとしてのドイツ観念論哲学 －哲学史上最も面白い人間ドラマの心理学－ |

第2部 フィヒテ 初代公選学長

ベルリン大学の初代公選学長は、哲学者フィヒテである。彼は、シェリング、ヘーゲルと並ぶドイツ観念論哲学のビッグ3と呼ばれる。この3人はベルリン大学の教員をつとめた。ベルリン大学はドイツ観念論哲学の牙城といっても良い。

フィヒテは、哲学史の教科書に必ず出てくる大学者であるが、あちこちで問題をおこして浮き沈みの激しい人生を送った。その人生と学問を追い、ベルリン大学との深い関わりをみていこう。

フィヒテの活動範囲



この地図に示すように、フィヒテの活動範囲はとても広い。多くの場所を移動し、いろいろな人と出会っている。多動であり、ひとときも同じ場所で平穏な時期をすごしたことがない。

◆フィヒテの生涯

| | 年 | 年齢 | | 場所 | 出会った人物 |
|---|--------------|------------|--------------------------------|------------------------|-------------------------------|
| ① | 1762 | 0歳 | ランメナウに生まれる マイセン、プフォルタの学校で学ぶ | ランメナウ マイセン プフォルダ | |
| ② | 1780 | 18歳 | イエナ大学入学 | イエナ | |
| ③ | 1781 | 19歳 | ライプツィヒ大学転学 あちこちで家庭教師 | ライプツィヒ チューリヒなど | ペスタロッチ |
| ④ | 1791 | 29歳 | ケーニヒスベルクのカント尋ねる | ケーニヒスベルク | カント |
| ⑤ | 1791 | 29歳 | ダンツィヒなどで家庭教師 | ダンツィヒなど | |
| ⑥ | 1794 | 32歳 | イエナ大学助教授 | イエナ | ゲーテ、シェリング、 ヘーゲル |
| ⑦ | 1799 | 37歳 | イエナを去り、ベルリンに移動 | ベルリン | シュレーゲル兄弟 フンボルト シュライアマハー |
| ⑧ | 1805 | 43歳 | エルランゲン大学教授 | エルランゲン | |
| ⑨ | 1807 | 45歳 | ケーニヒスベルク大学教授 ベルリンに戻る | ケーニヒスベルク ベルリン | |
| ⑩ | 1810 1814 | 48歳 52歳 | ベルリン大学開学 教授 死亡 | ベルリン | |

貧しい生い立ち

ヨハン・ゴットリープ・フィヒテ (Johann Gottlieb Fichte) は、ザクセン侯国のランメナウ村に生まれた。親は貧しいヒモ織の職人であった。フィヒテは7男1女の長男であり、貧困のため家業を手伝い、学校には行けなかった。

ミルティッツ男爵に才能を見出される

彼は人並みはずれた記憶力があり、日曜ごとに教会で説教を聞くうち、牧師の説教を暗記して、人に話せるほどだったという。ある日、マイセンの男爵ミルティッツが牧師の説教を聞くために、この村にやってきたが、時間に遅れて聞き逃してしまった。そこで、説教を暗記している少年がいめと聞いて、フィヒテ少年が呼ばれ、男爵の前で説教を披露した。男爵は、フィヒテの才能に感心して、フィヒテに学費を与えることにした。

フィヒテは家庭教師について勉強し、さらにマイセンの市立学校に通った。

ミルティッツ男爵は亡くなってしまったが、引き続き未亡人によって扶養を受けることができ、プフォルタの王立学校 (のちにニーチェやランケも学んだ名門校) に入学し、奨学生となった。

イエナ大学とライプツィヒ大学で学ぶ

18歳でイエナ大学の神学部に入學した。イエナ大学は、後に助教授として呼ばれ、彼の哲学者としての第一歩を印した場所である。イエナでの学生時代に、スピノザを知って、哲学に関心を持ったという。

19歳でライプツィヒ大学に転学し、哲学と法学を学んだ。ところが、ライプツィヒで、ミルティッツ家からの援助が途絶えてしまい、生活に苦勞することになる。

自殺を考えるほどの生活苦と「決定論」

あちこちで家庭教師を続けながら苦學して勉強を続けた。お金がなくて大学の試験が受けられないため、牧師となる夢を捨てた。絶望し、26歳の誕生日の前日に、自殺を決意するほどであった。

生活苦とともに、フィヒテを苦しめたのは「決定論」であった。一切の事物の生起は、神によって必然的に決められており、不可避であるという考えである。運命によって決まっており、自分の力ではどうしようもなく、自由などというものはない。これはスピノザの決定論の影響が大きい。

後述のように、この決定論から解放してくれたのがカントの「自由論」だった。

自殺を考えるほど思い詰めた若きフィヒテだったが、その時に、詩人のヴァイセンからチューリッヒのホテル経営者の家庭教師に決まって、自殺を思いとどまった。

チューリッヒで生涯の伴侶ヨハンナと出会う

チューリッヒでは、知人のラーン家に出入りし、娘ヨハンナ・ラーン (1755~1819年) と知り合って、婚約した。フィヒテが26歳、ヨハンナ33歳の時であった。その後、ヨハンナに結婚の希望を伝えたが、ラーン家の経営危機で延期されてしまった。やっと結婚できたのは、フィヒテが31歳、ヨハンナ38歳の時だった。

岩崎 (1974) の (自伝ステレオタイプな) 紹介によると、「ヨハンナはフィヒテよりも4歳年上であり、取り立てて美しくもなかったといわれるが、フィヒテは自分を深く理解してくれるヨハンナに強く惹かれ、二人の間には終生の間続いた真の愛が芽生え、1790年に婚約した」

「4歳年上」と書かれているが、ヨハンナ・ラーンの生年として、墓石に刻まれているのは1755年であり、1762年生まれでフィヒテより7歳年上である。

フィヒテは、本論に出てくる学者の中では、最もまじめで、女性に対して最も誠実であり、少し安心する。

カントを読んで「決定論」から救われた

28歳の時、チューリッヒからライプツィヒに戻った頃に思想的展開が待っていた。

ある学生から、カントの哲学を個人的に教えてくれるように頼まれた。フィヒテはカントに興味はなかったが、生活のために引き受けた。カントの『実践理性批判』『判断力批判』『純粹理性批判』をこの順に読んだのである。カントの著作はフィヒテの人生を変えた。カントの哲学を研究することを決意した。哲学の道は、パンには困るが、人生の目標を与えてくれた。

なぜこれだけカントに感動したかということ、カントの「自由論」が、フィヒテを「決定論」から救い出してくれたからである。若い頃のフィヒテは、スピノザの決定論の影響もあって、一切の事物の生起は、神によって必然的に決められており、不可避であるという考えにとりつかれていた。自分の力では決められた運命を変えることはできず、自由などというものはない。こうした考え方は、フィヒテの貧しく自分の思い通りにならない厳しい前半生を反映していただろう。生活苦から将来に絶望し自殺まで考えた前半生である。

これに対して、カントの哲学は、理性を重視し、決定論を覆す「自由」ということを強調する。この考え方は、カントの『実践理性批判』における思想である。カントの哲学は、フィヒテを「決定論」の絶望から救い出す「自由」への道を示してくれた。フィヒテの人生とカントの哲学ががっちり噛み合った。

「人がどういう哲学を選ぶかは、その人がどういう人間であるかによっている。というのは哲学体系というのは、われわれの好むままに捨てたり取ったりすることのできる死んだ家具ではなく、それを持っている人間の心によって生命を与えられているものであるからである」『知識学への第一試論』 (フィヒテ、岩崎武雄訳)

フィヒテは1790年に論文「カント純粹理性批判からの説明的な抜粋の試み」を書き始めた。

ケーニヒスベルクのカントに会いに行く

1791年、29歳のフィヒテは、家庭教師の口を探して、ポーランドのワルシャワの貴族に会いに行ったが、不調に終わった。そこで、彼はケーニヒスベルク（現ロシア領カーニングラード）に回った。ケーニヒスベルク大学のカントに会いに行ったのである。当時のフィヒテは、結婚したばかりで、家庭教師の口もなく、無職で困っていた。ワルシャワやチューリヒへに行くときも、歩いて行かなければならないほど、お金がなかった。

アポなしで面会を求めたので、最初は相手にされなかった。そこで、フィヒテは『あらゆる啓示の批判の試み』という論文を書いて、カントに送って読んでもらった。カントは一部を読んだだけだったが、フィヒテの才能を知って、彼に好意的になった。

カントに借金を申しこんで断られる

つけあがったフィヒテは、カントに借金を申しこんだが、さすがに断られた。そのかわりに、カントはフィヒテの論文を出版することに力を貸してくれた。こうしたエピソードには、フィヒテの勝負師のような人柄があらわれている。

カントの詐欺で一躍有名になる

カントの仲介で出版されたフィヒテの著書『あらゆる啓示の批判の試み』が有名になった経緯も不思議である。

この本は宗教がテーマであり、著者名を明かさずに匿名で出版されたのである。このため、この本は、長い間待ち望まれていたカントの宗教哲学だと誤解された。当時、カントは、三批判書は出していたが、宗教論である『単なる理性の限界内の宗教』はまだ出版しておらず、哲学界から待ち焦がれられていた。だから、この本こそがカントの宗教論だと誤解された。批評家のフーフェラントがだまされて、この本を賛辞した。いつもカントが出す出版社の本だし、カント崇拜者のフィヒテが書いたので、内容がカントを思わせるのも当然である。

こうして有名になってから、カントは本当の著者名を公表した。これによってフィヒテの名前は一躍有名になった。ある意味でカントは詐欺をはたらいたことになるが、陰で彼はニヤニヤしてこの騒動を見ていたかもしれない。

この1792年に出版された著書『あらゆる啓示の批判の試み』の評判のために、2年後の1794年にフィヒテはイエナ大学の助教授として呼ばれることになる。

また、カントの紹介を辿って、ダンツィヒの家庭教師先も決まった。カントにはフィヒテはたくさんの恩を負っている。

教育学者ペスタロッチを知る

ケーニヒスベルクから戻ったフィヒテは1792年からダンツィヒ（現在のポーランドのグダンスク）で家庭教師をした。

フィヒテは、フランス革命に感激し、1793年に論文を書いた。この頃はフランス革命に熱狂していたフィヒテだったが、しかし、ナポレオンがヨーロッパを侵略してから一変し、反ナポレオン運動に向かうことになる。

30歳の頃、イエナ大学の哲学者ラインホルトの研究をし始めた。31歳の頃には、フィヒテ独自の「自我」の概念に到達していたという。

31歳の時、再びチューリヒへ行き、教育学者ペスタロッチ（1746～1827年）と知り合いになり、その教育論に傾倒した。ペスタロッチの教育論は、後の有名な『ドイツ国民に告ぐ』にも登場する。

イエナ大学助教授となる

フィヒテは、家庭教師の口も不安定であり、当時は無職であった。カントに紹介してもらったダンツィヒでの家庭教師が1893年3月で終わり、6月にスイスのチューリッヒにつくと、10月にハンナと結婚したが、仕事はなかった。

その12月にイエナ大学から招聘の手紙を受け取ったのだった。この就職が決まらなければ、フィヒテ夫妻は路頭に迷っていただろう。

1794年、フィヒテは32歳にしてイエナ大学の助教授となった。これまで生活苦にあえいでいたフィヒテが、初めて大学教員という定職につくことができたのである。

フィヒテは、自分が学生時代に学んだ母校の教員となれたわけである。

ラインホルトの後任として

フィヒテは、教授のラインホルトの後任として、イエナ大学に呼ばれた。

ラインホルト（Karl Leonhard Reinhold、1757～1823年）は、カント哲学を高く評価し、ドイツ哲学界にカントを最初に紹介した哲学者である。1787年にイエナ大学教授として招かれて、イエナ大学をカント哲学研究の中心地にした。ラインホルトは、1789年の『表象能力の新理論の試み』において、カント哲学の理

論理性と実践理性の不統一を指摘し、それを「意識」という点から一元化しようとした（根源哲学）。こうした問題意識が、フィヒテに影響を与えた。フィヒテも、カント哲学の理論理性と実践理性の不統一を統一しようとして、「自我」という点から一元化しようとした（自我哲学）。その意味で、ラインホルトは、カント哲学とフィヒテの自我哲学を橋渡しし、ドイツ観念論哲学への道筋をつけた重要な哲学者といえる。フィヒテは、1792年ころからラインホルトを研究するようになった。

ラインホルトは、1794年にキール大学から呼ばれて異動したので、イエナ大学のポストが空席となった。

この頃、カントが推薦した著書『あらゆる啓示の批判の試み』の名声によって、フィヒテが候補となり、1794年、32歳にしてイエナ大学の助教授に招かれたのである。ここでも、フィヒテの著書がカントに推薦されたということが、就職に大きな力を与えている。また、当時ラインホルトの哲学について研究していたことも、運がよかった。この人事にはゲーテの推薦もあった。

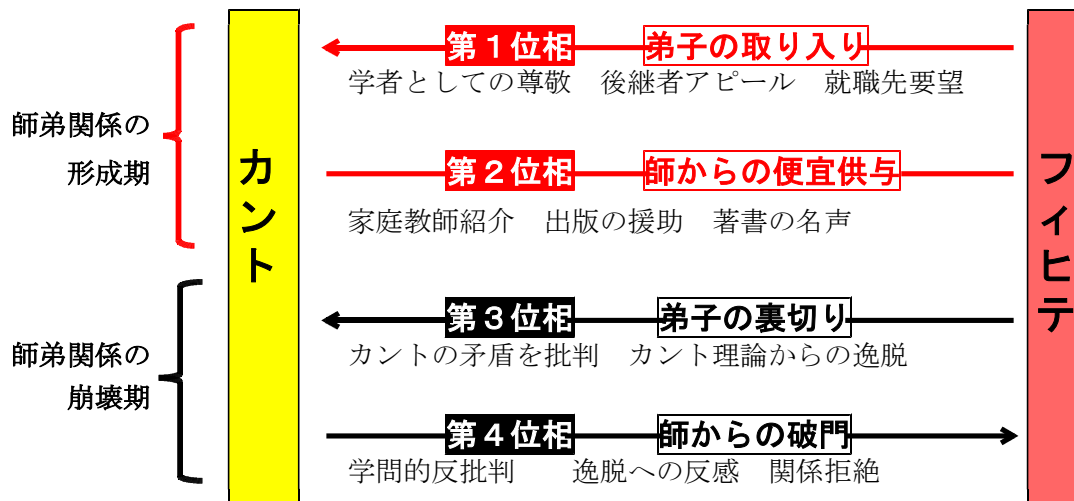
カントとフィヒテの子弟関係

それまで全く教職の経験がなかったフィヒテが、イエナ大学に就職することができたのは、カントのおかげとよい。

ここでカントとフィヒテの師弟関係についてまとめておこう。

師弟関係は、形成期と崩壊期に分けられる。それらは、それぞれ、弟子から師への働きかけと、師から弟子への働きかけに分けられる。そこで、全体として4つの位相に分けられる。第1位相は「弟子から師への取り入り」であり、第2位相は「師からの便宜供与」、第3位相は「弟子による師への裏切り」、第4位相は「師から弟子への破門」である。

図 カントとフィヒテの師弟関係



第1位相 弟子の師への取り入り（フィヒテ→カント）

始まりは、1791年、29歳のフィヒテが、ライプツィヒからわざわざケーニヒスベルク大学のカントを尋ねたことにある。フィヒテはカントの著作を読んで感動し、学者として尊敬していることを示した。しかし、無名のフィヒテは相手にされなかった。そこでケーニヒスベルクに滞在して論文『あらゆる啓示の批判の試み』を5週間で書きあげた。これをカントに見てもらい、カントの後継者たることをアピールした。フィヒテの論文を読んだカントはフィヒテの実力を認めた。

当時のフィヒテは、結婚したばかりで、家庭教師の口もなく、無職で困っていた。ワルシャワやチューリヒへに行くときも、歩いて行かなければならないほど、お金がなかった。そこで、フィヒテはカントに借金を申し込んだほどである。大学のポストへの就職は喉から手が出るほど欲しかった。フィヒテの猛烈な売り込みによって、カントから著書の出版先や家庭教師先を紹介してもらうことができた。それまで全く大学で教えた経験のなかったフィヒテが、イエナ大学に就職することができたのは、カントのおかげである。もしイエナ大学の就職が決まらなければ、フィヒテは路頭に迷っていただろう。

第2位相 師からの便宜供与（カント→フィヒテ）

カントとフィヒテの利益は双方向的である。フィヒテがやってきたとき、カントは67歳、ケーニヒスベルク大学の教授であり、すでに哲学上の弟子はたくさんいた。とはいえ、フィヒテに対して、哲学上の実力を認め、自分の哲学の継承者のひとりを見いだしたという師弟関係を感じ取ったので、いろいろな援助を与えたのだろう。

カントは、わざわざ遠くケーニヒスベルクまで会いに来てくれるほど尊敬されたことを喜んだであろう。フィヒテに対して、後継者となることを期待して、好意を持った。借金の申しこみは断わったものの、家庭教師先を紹介した。また、カントは出版社を紹介した。このために、フィヒテは著書『あらゆる啓示の批判の試み』を出版することができた。しかも、この本は、匿名で出版されたので、カントの著書だと誤解され、それによって逆にフィヒテの名声が上がった（こうしたトリックを仕掛けたのもカントである）。この本の名声によってゲーテなども推薦してくれて、フィヒテはイエナ大学に呼ばれた。カントがフィヒテに対して、直接的にケーニヒスベルク大学のポストを用意したわけではないが、間接的には、カントがイエナ大学のポストに近づけたことになる。イエナ大学にフィヒテが就職したことで、他の大学ではあるが、カントは大学人としての哲学上のひとりの弟子を持ったことになる。実際のところ、カントが1804年に亡くなって3年後の1807年には、フィヒテはケーニヒスベルク大学の教授となった。フィヒテはついに、師であるカントの大学の後継者となることができた。さらに、結果的に言うなら、哲学史の大きな流れにおいては、カントを継承したフィヒテたちがドイツ観念論哲学をたちあげたために、カント哲学がその重要性を増したことも事実であろう。

ふたりは双方ともに利益を得たが、より多くの利益を得たのはフィヒテのほうであろう。それまで全く教

職の経験がなかったフィヒテが、イエナ大学に就職することができたのは、カントのおかげといってよい。

第3位相 弟子の裏切り（フィヒテ→カント）

ところが、フィヒテがイエナを出て、ベルリン時代に入ると、2人の関係は冷めたものになる。

フィヒテはカント哲学を批判し、それによってオリジナルな自我哲学を確立した。フィヒテによると、カントの説には不統一がある。『純粋理性批判』においては「理論理性」だけを扱い、『実践理性批判』においては「実践理性」だけを扱っており、この2つの理性はただ並列的に並べられているだけであり、うまく統一されていない。フィヒテは、1797年に『知識学への第二序論』において、「どこにも哲学すべての基礎を扱っていない」と述べて、カント哲学を批判した。フィヒテはカントの不統一を克服して、カント哲学を補おうとしたのである。『全知識学の基礎』において、カントの「理性」を「自我」と置き換えて、フィヒテは「実践自我」と「理論自我」の関係を考えた。大元は能動的な「絶対的自我」である。絶対的自我から現れた「実践自我」は、「非我」を乗り越えようとする。しかし、乗り越えられなかったときに、「非我」を認識しようとして「理論自我」が現れる。こうしたダイナミックな動きとして実践自我と理性自我を統一的にとらえようとした。これによって、カント哲学の基礎を確立したと主張した。

フィヒテは、恩人である師のカントの哲学から逸脱して行った。フィヒテのいう「絶対的自我」には二面性がある。フィヒテによると、「絶対的自我」は、カントのいう「超越論的統覚」のことだという。「超越論的統覚」とは、われわれ人間の意識経験の根底にある「われ思う」という能動的働きのことであり、この意味では、確かにフィヒテはカント哲学の範囲内にある。ところが、フィヒテは、カント流に「神」や宗教を退けながらも、実は、裏では「神」や宗教を取り入れていた。フィヒテによると、「絶対的自我」は、無限のものであり、「非我」の制限も受けることはないという。どうみてもこれは「神＝絶対者」のことである。フィヒテ自身はそれを否定しているものの、この意味では、フィヒテはカント哲学を逸脱しているのである。せつかくカントが「神」学を哲学から切り離れたのに、フィヒテは逆戻りしてしまった。実際、フィヒテの後期思想においては、自我哲学は捨てられ、「神＝絶対者」の哲学をとらえるようになる。こうした点をカントから批判されるとやり返した。

第4位相 師からの破門（カント→フィヒテ）

カントにとって、フィヒテがカントの哲学の矛盾を統一したと豪語したことは、許されざる逸脱であっただろう。カントは、1798年には、以下のように述べて、フィヒテを批判した。「単なる自己意識、しかも素材を持たない、したがってまたこれに対する反省は適用さるべき何らの対象を持たず、それ自身は論理学をも超越するというような単なる思惟形式だけの自己意識は読者に奇妙な印象を与える。すでに表題（知識学という）を見ただけではほとんどその成果を期待することができない。」（1798年ティーフトルク宛の手紙）岩崎（1980）訳。

また、フィヒテは、カント哲学の「実践自我」と「理論自我」は矛盾すると批判するが、カントにとってはそれらは矛盾ではない。カントは、信仰（実践理性）に場所を与えるために、知識（理論理性）を取り除かねばならなかったという。75歳のカントは、1799年に、「フィヒテの知識学に関する声明 *Beziehung auf Fichtes Wissenschaftslehre*」を発表した。ここで、フィヒテの批判に対して反論し、フィヒテの「知識学」を「単なる論理学」にすぎないとして切り捨てた。カントからの反批判に対して、フィヒテは「一般学芸新報」誌上でこれに答えた。

すでに大哲学者として尊敬されていた75歳のカントにとって、自分より38歳も年下のフィヒテから、カントの哲学の矛盾を批判され、しかもそれを統一したと豪語されることは、プライドが許さないことだっただろう。自分の哲学の後継者として期待したフィヒテが、カントの哲学を逸脱したことは、飼い犬に手をかまれたといった反発を覚えただろう。1799年のカントの批判に対してフィヒテは答えたが、これ以後、1804年にカントが死ぬまで、ふたりが交流することはなかった。実質的に、カントはフィヒテを破門したことになる。

このようにカントとフィヒテの師弟関係は崩れていくのである。ただし、カントとフィヒテは、同じ大学に勤めたわけではなく、哲学理論上の師弟関係にとどまったので、あまりドロドロした人間的な関係にはならなかった。しかし、もしふたりが同じ大学に勤めていたら、もっとドロドロとしたものになったかもしれない。

カントとフィヒテの師弟関係は、後述するフィヒテとシェリングの師弟関係、さらにはシェリングとヘーゲルとの師弟関係と全く同じ構造をしている。後二者の関係は、同じイエナ大学に勤めていたので、ドロドロした人間関係となったのである。

イエナ時代の旺盛な著作活動

フィヒテのイエナ大学の講義は、学生の人気は高かった。公開講座には聴衆があふれ、フィヒテの名声は、前任者のラインホルトを凌いだ。

イエナ大学時代は、フィヒテの著作活動が最もさかんな時期であった。

1794年には『知識学すなわちいわゆる哲学の概念について』を出版した。また、イエナ大学の公開講義『学者の使命について』をおこない、それを1794年に出版した。

私講義『全知識学の基礎』をおこない、それを1794年～95年に出版した。この『全知識学の基礎』がフィ

ヒテの主著となり、ドイツ観念論哲学の出発点となった本である。
 1796年には『自然法の基礎』、1798には『道徳論の体系』を出版した。
 さらに、1794年には「知識学への第一序論」「第二序論」などの多くの論文を発表した。

ドイツ観念論哲学のビッグ4

ドイツ観念論哲学の4巨頭




カント




フィヒテ




ヘーゲル

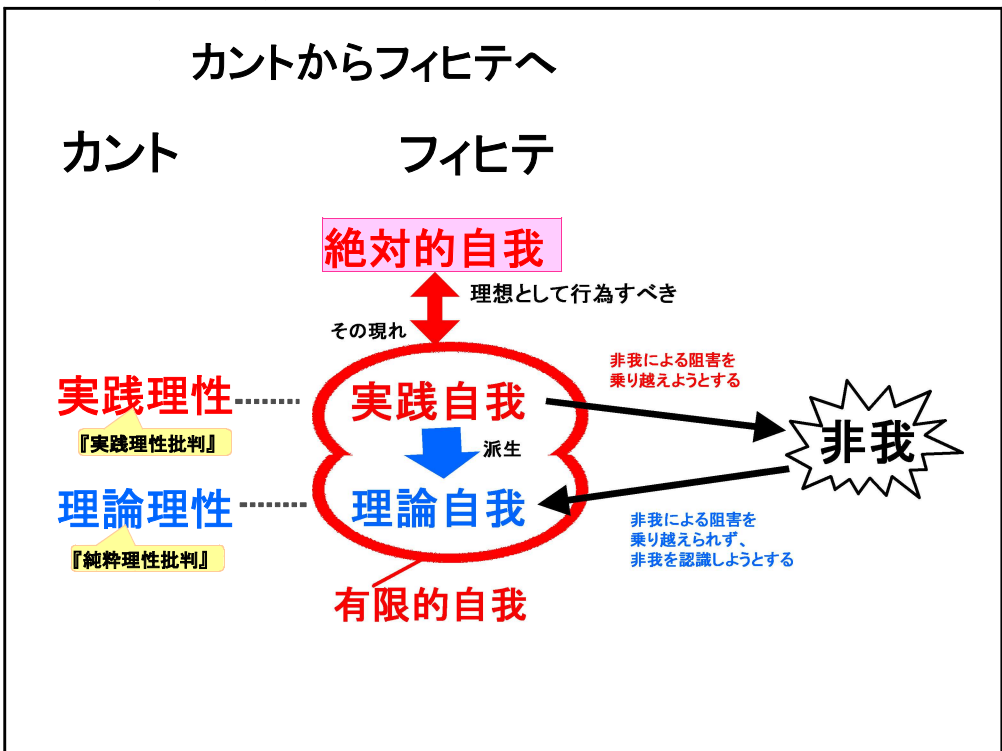



シェリング

出典: Wikipedia

カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルはドイツ観念論哲学の4巨頭と呼ばれる。
 ドイツ観念論哲学は、日本の学生にもよく読まれた。とくに旧制高校の学生の必読書であり、岩波文庫でよく読まれた。
 今は絶版になっているものも多く、Amazonで古書を探すと、結構いい値段になっている。

主著『全知識学の基礎』



フィヒテの1794年～95年の主著『全知識学の基礎』は、ドイツ観念論哲学の出発点となった本である。この本でフィヒテはカントの哲学を補おうとしたのである。
 カントとフィヒテの理論の関係は上の図のようにならわすことができる。カントが左側、フィヒテが右側である。

カントの観念論

イマヌエル・カント (Immanuel Kant ; 1724~1804年) は、ケーニヒスベルク大学の教授で、ケーニヒスベルクの地からほとんど出ないで生涯を終えた。多動なフィヒテとは正反対の性格である。

教養学部時代にとった「哲学史」の教科書を引っ張りだしてきて見ると、次のように書かれている。

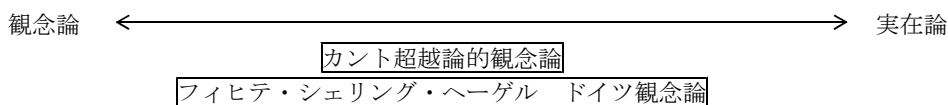
「カント哲学の歴史的 position は・・・第一には、それがヨーロッパの近代世界観に哲学的表現を与えたということ、第二には、近代ヨーロッパの歩みのうちでられる二つの哲学的な方向、すなわち大陸の理性論とイギリスの経験論とを総合したということ、第三には、以上によってかれ自身が生存していた十八世紀啓蒙思想を完成すると同時に克服したということ、これら三つにもとめることができる。」

山崎正一・原佑・井上忠『西洋哲学史』東京大学出版会、1965.

カントの三批判書、すなわち『純粋理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』がフィヒテの出発点となった。

カントは、『純粋理性批判』において、理論的理性の限界を強調する。理論理性が認識できるのは「現象」（経験のおよぶ範囲）に限られるのであって、現象の背後にある超感性界（物自体、神の世界）については認識することはできない。このようにカントは理論理性の認識の限界を強調する。

観念論と実在論という井立軸で考えてみよう。



素朴に考えると、外界は実在するという実在論になる。壁にぶつかったら痛いので、外界には壁があることは間違いがない。自然科学はそうした実在の世界を研究対象として成功してきた。

しかし、われわれ人間の感覚は物理現象のごく一部を感覚しているにすぎない。例えば、人間の目は380nm~780nmの間の光だけしか感覚できず、それ以外の波長世界は認知できない。人間に認識される外界とは、知覚される範囲にすぎない。ここから「存在するとは知覚されることである」といったバークリーの独我論（不可知論）が出てくる。外界の物は存在せず、外界についての「観念」だけがあるとする立場が「観念論」である。そもそも私が死ねば外界の実在などはどうでもよいことであって実在しないも同じなのだから、外界とは「私」という意識が作り出した観念にすぎないとも言えないこともない。観念論からすると、外界の認識は夢や幻想と同じものにすぎないので、人間の認識の客観的妥当性はないということになる。

『マトリクス』の世界

これは映画『マトリクス』（1999年）などのSFを考えればよい。『マトリクス』の主人公は、今まで現実だと思っていた世界が、実はコンピュータが人間の神経に電気信号を送って見せている仮想現実すぎないことを知る。ここでは、コンピュータの世界こそが現実であり、人間の体験する「現実」は夢にすぎない。人間は、コンピュータこそが「実在」であるということを理解できない。しかし、一段上から眺めて見ると、人間は、体験していることが「実在」だと思っているが、体験しているのは「観念」にすぎない。バークリーの独我論（不可知論）とはこのようなことである。昔の哲学者は、コンピュータのかわりに「神」という装置を使ってこのことを説明していた。『マトリクス』の「コンピュータ」は、「神」と同じ装置である。このコンピュータ=神の世界こそが、カントの言う「物自体」「形而上学」「超感性界」の世界である。また、これをフィヒテは「非我」と呼ぶ。

スタニスワフ・レムによる認識論のSF表現

映画『マトリクス』（1999年）のような設定は、ポーランドの作家スタニスワフ・レムによって早くから描かれている。『泰平ヨンの回想記』（1957年、邦訳は早川文庫）所収の「鉄の箱」という短編には、マッドサイエンティスト・コルコラン教授によって、自我意識と外界の感覚情報の両方がプログラムされたコンピュータが描かれる。すなわち「鉄の箱」は、自己と外界のすべてを含む完結した世界である。彼の存在様式は、ある意味で、人間の存在と等価であり、彼はいわば人間のシミュレータである。こうしたシミュレータでは、オカルト現象や奇跡をきわめて物理的に引き起こすことができる。例えば「鉄の箱」の外界環境情報の回路のどこかをショートさせれば、それが彼の世界のテレパシーやデ・ジャ・ヴュや未来予知であるということになる。ところで「鉄の箱」内の意識は、しだいに自分の起源について考え始める。彼が自己の起源を知るための手段は、思弁による推測以外にない。しかし第三者にとっては、かれの起源はあくまで明白だ。コルコラン教授こそ彼の創造者であり、神の位置にある。ならばわれわれ人間の存在もまた、ひょっとして誰かによって作られた「鉄の箱」かもしれない・・・。

レムの作品の哲学的分析については、次の拙論を参照いただきたい。

丹野義彦『レム論 あるいはレムのSFはどこがすごいのか』 <http://tannoy.sakura.ne.jp/>

さて、この対立軸において、カントは中間に位置する。カントは、外界の物（物自体）は存在することを認める。しかし、人間が認識できるのは感覚や思考によって捉えられる「現象」にすぎないとした。これは素朴な実在論でもないし、素朴な観念論でもなく、超越論的観念論（der transzendentaler Idealismus）と呼ばれる（私の学生時代は「先験的観念論」と訳されていた）。素朴な観念論は、外界の認識は夢や幻想にすぎないので、人間の認識の客観的妥当性はないと主張する。これに対し、カントは、認識することはできないが、外界の物（物自体）はたしかに存在するので、人間の認識は、夢や幻想ではなく、客観的妥当性はあるとした。

カントの超越論的観念論から出発するのがフィヒテ、シェリング、ヘーゲルである。それで3人は「ドイツ観念論」として括られる。3人は、それぞれ、カントが考えた主体の能動性や、観念の積極的意味を徹底して考えて、独自の思想を発展させた。

カントがいう「理論理性」は、単に「現象」を認識しうるだけであって、現象を超えたもの（「物自体」とか超感性界と呼ぶ）の世界は決して認識できない。

ところが、一方で、カントは『実践理性批判』においては、物自体つまり「神」などは、認識はできないが、実践理性が要請するものであるとした。つまり、実践理性は、現象界に属するものではなく、超感性界（すなわち信仰の世界、神）に属する。ここでは、「物自体」は「神」ということになる。超感性界での自発的な働きこそが「道徳」なのだとする。

カントの限界を越えようとするフィヒテ

フィヒテによると、カントの説には不統一がある。『純粋理性批判』においては「理論理性」だけを扱い、『実践理性批判』においては「実践理性」だけを扱っており、この2つの理性はただ並列的に並べられているだけであり、それらの間の関係がわからない。

カントの理論理性と実践理性はうまく統一されていない。片や受動的理性であり、片や能動的理性であり、同じ理性なのに、全く違っている。片やすべて決定されて自由のない理論理性である。片や自由のある実践理性である。カントにとっては、この2つは矛盾するものではなかったが、しかし、フィヒテにとっては矛盾と感じられた。そこでフィヒテはこの矛盾を克服して、カント哲学を補おうとしたのである。

『実践理性批判』→『純粋理性批判』という順序がラッキー

つまり、カントは、まず『純粋理性批判』において、人間の認識には限界があり、人間は因果律に縛られて「自由はない」とした。次に、『実践理性批判』において、形而上学（先験論）の世界では「自由がある」として、それを求めて倫理や宗教ができるとした。

フィヒテは、その逆のコースで、人間には「自由はある」が、しかし、認識の世界では因果律に縛られていて「自由はない」とした。同じことを言っているが、重点の置き方が違う。このようになったのは、フィヒテが読んだカントの著作の順序だとも言われる。

カントが発表したのは『純粋理性批判』→『実践理性批判』→『判断力批判』の順である。カントは、純粋理性→実践理性という順序で思索を形成していき、それによって実践理性の「自由」に辿りついた。「信仰に場所を与えるために知識を取り除かなければならなかった」とカントはいう。

これに対して、フィヒテは、『実践理性批判』→『判断力批判』→『純粋理性批判』の順に読んだのである。この順序が大きな意味を持っている。

フィヒテは、『実践理性批判』を最初に読んだので、カントが最終的に辿りついた結論から先にカントに入った。このために、フィヒテは、「決定論」を越えるカントの「自由論」に接することができて、救われたと感じたわけである。『実践理性批判』を読んで、「自由」で能動的な実践理性で救われたのに、ところが、『純粋理性批判』を読むと、「決定論」的で受動的な理論理性の暗い世界に逆戻りする。話が違うではないか。こうして、フィヒテは、カントの不統一に気がついた。この不統一を統一することから、フィヒテの自我哲学が始まるのである。

自我哲学 自我の三原則

フィヒテは、主著『全知識学の基礎』において、「自我」ということを強調する。カントのいう「理性」は、そもそも人間の自我の働きであるから、「理性」という用語のかわりに、フィヒテは「自我」という用語を使う。カントの「理論理性」を「理論自我」と呼び、「実践理性」を「実践自我」と呼ぶ。

フィヒテはこれらの関係を3段階で順を追って説明し、3原則と呼んでいる。

第1原則 絶対的自我と有限的自我

フィヒテ 自我哲学の三原則 その1

第1原則

絶対的自我

その現れ



第2原則

絶対的自我

非我による障害を
乗り越えようとする



第1原則は「絶対的自我」である。図にあらわされるように、絶対的自我が最初にある。まず自我の働きが存在するのである。人間の理性の根本は自我の働きである。自我とはもともと無限で純粋な能動的な働きであり、絶対的に自らを実現（定立）するものである。これをフィヒテは「絶対的自我」と呼ぶ。

「絶対的自我」とは、カントが「超越論的統覚」と呼ぶものである。これは個人の自己意識とは違うものであり、われわれ個々の人間の意識経験の根底にある「われ思う」という能動的な働きのことである。

絶対的自我から「有限的自我」が表れる。図で言うと、赤い楕円の部分を指している。

「有限的自我」とは、われわれ個々の人間の自己意識のことである。「絶対的自我」が人間に共通のものであり、人間を「超越」した無限のものであるのに対し、「有限的自我」は個々の人間の有限の体験である。絶対的自我が具体的に現れたものが、個人の「有限的自我」である。絶対的自我は能動的な働きを持っているので、有限的自我もそもそもは能動的である。

第2原則 非我

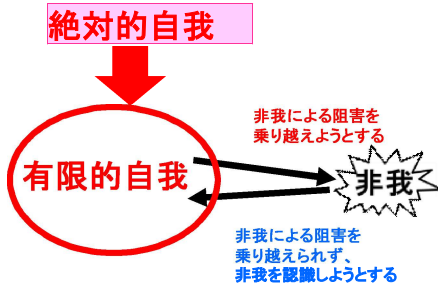
第2原則は「非我」である。自我の働きを障害するものが「非我」である。自我が働き出すと、例えば「運命」のような、自分ではどうしようもない定めによって、制限される。こうした自我が対立するものを「非我」と呼ぶ。図に示すように、有限的自我は、非我による障害を乗り越えて進もうとする。

第3原則 自我と非我の相互関係

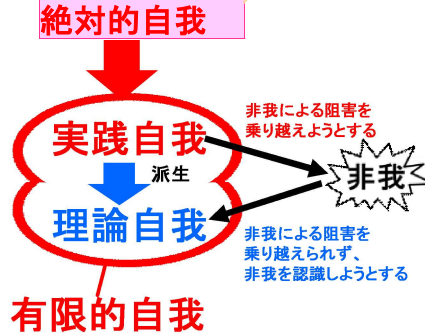
フィヒテ 自我哲学の三原則 その2

絶対的自我とは？ 二面性
 ①絶対的自我＝超越論的統覚
 カントの範囲内
 ②絶対的自我＝神(絶対者)
 カントを逸脱

第3原則(1)



第3原則(2)



第3原則は、自我と非我の相互関係である。これは次のような経過として説明される。まず絶対的自我が存在する。それは無限の純粋な働きであり、能動的で実践的である。絶対的自我の現れが有限的自我であるが、そもそもは能動的・実践的であるから、「実践自我」と呼んでもよい。実践自我が自己実現する過程では、それを障害するものがあらわれる。これを「非我」と呼ぶ。しかし、実践自我は、非我による障害を乗り越えていこうとする。

しかし、有限的自我＝実践自我が非我を乗り越えようとしても、どうしても乗り越えられない場合もある。その時に、自我は非我を「認識」しようとする。非我に突き当たった時に、自我は、非我（制限や障害）がなぜ起こるのか、つまり非我の性質をよく理解しようとする。

このようにして現れるのが「理論自我」である。図の(1)に示すように、もともと「有限的自我」はひとつであり、赤い楕円で示されている。それが、「非我」との相互作用の結果、「実践自我」と「理論自我」という2つに分かれる。こうして図の(2)に示すように、2つの部分からなるヒョウタン型に変わる。

つまり、もともと「実践自我」が先にあって、図に示すように、そこから派生したものが「理論自我」である。実践自我の働きがなければ理論自我はない。その逆ではない。もともと実践自我は能動的であるが、非我を乗り越えられない時に理論自我が働くので、理論自我は受動的である。このように、実践自我と理論自我、能動性と受動性のように、一見すると正反対の働きに見えるが、実は、もともとひとつだった有限的自我が分かれていく経過の違いにすぎない。

カントの不統一を統一した

フィヒテの別の言い方によると、「非我を制限する」能動的な自我の部分が「実践自我」である。これに対し、「非我に制限される」受動的な自我の部分こそが「理論自我」である。

実践自我も理論自我も、もともとはひとつの自我の働きだったのが、非我との関係によって後で分かれたのである。カントでは理論理性と実践理性がバラバラだったのに対し、フィヒテでは「実践自我」と「理論自我」が統一的に理解できたわけである。だからカント哲学をうまく補って救ったのだとフィヒテは言う。このように、フィヒテは「自我」という働きを強調するので、「自我哲学」と呼ばれる。

倫理的観念論

さて、ひとつ前の図において、絶対的自我と有限的自我の関係のところに、「理想とすべき」と書いておいた。これについて言うと、「絶対的自我」は、自我の本来のあり方であり、真の自我と言ってもよい。だから「絶対的自我」(真の自我)のあり方は、われわれ「有限的自我」にとっては「理想」とすべきものとなる。図に示すように、「有限的自我」は、「絶対的自我」のあり方を理想として、実現のために努力をすべきとフィヒテはいう。絶対的自我という理想を実現しようとする意志的な努力こそ「道徳」の根源であるという。そこでフィヒテの思想は「倫理的観念論」と呼ばれる(岩崎、1974)。このような「意志」を強調する立場が、後の『ドイツ国民に告ぐ』へとつながっていく。

絶対的自我の二面性 神は排除されたか？

さて、「絶対的自我」について、もう一度考えてみよう。図の右上のパネルに示したように、「絶対的自我」には二面性がある。フィヒテによると「絶対的自我」は、前述のように、カントのいう「超越論的統

覚」のことだという。「超越論的統覚」とは、われわれ人間の意識経験の根底にある「われ思う」という能動的働きのことであり、「純粹統覚」「根源的統覚」などと呼んでいる。

フィヒテの「絶対的自我」は、もともと神とか宗教的なものをさすものではない。そもそもカントは、神や形而上学が扱う世界は、人間には認識できないものだから、哲学の対象ではないとした。ここから近代の哲学が始まった。フィヒテはカント哲学を前提としているので、神とか宗教を持ち込むはずはない。この意味では、カント哲学の範囲内にある。

ところが、フィヒテは、カント流に「神」や宗教を退けながらも、実は、裏では「神」や宗教を取り入れていた。フィヒテによると、「絶対的自我」は、無限のものであり、「非我」の制限も受けることはないという。どうみてもこれは「神」のことである。「神」とは絶対的なものであり、無限のものであるから、フィヒテの「絶対的自我」には、神の意志、神の無限性が暗示されている。

フィヒテが「絶対的」自我という用語を用いたり、それと「有限的」自我を対置させた背景には、「神＝絶対者」を想定していたと考えざるを得ない。フィヒテ自身はそれを否定しているものの、この意味では、フィヒテはカント哲学を逸脱しているのである。（実際、フィヒテの後期思想においては、自我哲学は捨てられ、「神＝絶対者」の哲学をとらえるようになる。）

こうしたフィヒテの「絶対的自我」の二面性は、もともとカントのいう「物自体」の二面性を引きずっていると言えよう。最初にあげた实在論と観念論の対立軸では、「物自体」とは、外界の物体や自然のことを指していた。ところが、意識界と超感性界という対立軸では、「物自体」は、超感性界にある「神」と位置づけられる。カントの「物自体」も二面性がある。これを引きずって、フィヒテにおいても、「絶対的自我」は、一方で、「有限的自我」の根底にある人間に共通した統覚のことであり、「非我」（外界の物体や自然）と対立するものである。ところが、他方では、無限で絶対的な「神」と位置づけられる。

このように、フィヒテの「絶対的自我」には、「超越論的統覚」と「神＝絶対者」という二面性がある。その意味で中途半端である。このあいまいさを批判したシェリングは、「絶対的自我」は「神＝絶対者」であると切り切った。これについては次のシェリングの項で述べる。

せっかくカントが「神」学を哲学から切り離れたのに、フィヒテは逆戻りしてしまった。この点で、カントはフィヒテを批判した。しかし、その後のフィヒテ→シェリング→ヘーゲルと続くドイツ観念論は、カントのように「神」を排除するのではなく、逆に「神」を取り込んでしまい、逆戻りのコースを歩んでいくのである。

フィヒテはシェリングをイエナ大学に呼ぶ

フィヒテは、シェリングを自分の後継者とみなして、イエナ大学に呼んだ。

フィヒテとシェリングの関係は、1793年に遡る。この年、フィヒテはテュービンゲン大学に3日間滞在して、講義をした。当時18歳だったシェリングはフィヒテの講義を聴いた。また、1794年には、イエナ大学の助教授となったフィヒテは、『知識学の概念』を公刊したが、シェリングはそれを読んだ。1794年に、フィヒテはテュービンゲン大学に半日滞在して講義をした。19歳のシェリングはそれを聞いて感激した。シェリングは、すぐに「哲学一般の形式の可能性について」という論文を書いて、フィヒテに送った。ここから、フィヒテとシェリングとの往復書簡が始まった。往復書簡は1802年まで続いた。

1795年、20歳の大学生だったシェリングは、『哲学の原理としての自我について』を出版した。フィヒテの学説は難解でまだ生成途上にあっただが、シェリングは、フィヒテの学説の要点をすばやく的確に捉えて、この学説を的確に解説してみせたのである。この著作によってシェリングはドイツ観念論の哲学者として世に認められた。

この時期のシェリング哲学の特徴は、フィヒテのコピーであった。フィヒテは、「シェリングの本は、私の本の注釈書です」とし、「私の本よりも明快だ」と述べているほどである。フィヒテは13歳年下のシェリングを自分の後継者とみなしていた。

1795年、20歳でシェリングは、テュービンゲン大学を卒業し、家庭教師をしながらライプニッツ大学で学び、独自の自然哲学を打ち立てた。1795～1801年に次々と5冊の哲学的著作を発表し、哲学者として頭角をあらわした。1798年、フィヒテの推薦によって、イエナ大学に招かれた。また、『世界霊魂について』を読んだゲーテが感心し、シェリングを推薦した。

このシェリングを、フィヒテは自分の後継者とみなしていた。イエナ大学において、シェリングは、助教授（無給）として、フィヒテとともに講義を始めた。「自然哲学」と「超越論的観念論」という2つの授業を持った。フィヒテの受講者は290～400名だったのに対し、シェリングの受講者は40名だったという。

フィヒテを襲ったトラブル その1 大学とのトラブル

フィヒテのイエナ大学の講義は、学生の人気は高かった。しかし、いろいろなトラブルをおこして、イエナ大学を追われてしまうのである。

平日に大学の講義を入れると他の教授と重なってしまうので、フィヒテは、すべての学生が聞くことができる時間帯として、日曜日に講義をおこなった。しかし、日曜日は礼拝の時間と決まっていたので、大学評議会と対立した。それで正式の弁明書を提出させられた。

フィヒテを襲ったトラブル その2 学生組合とのトラブル

また、学生間の事件について、フィヒテは3つの学生団体と対立した。当時のドイツの大学には、学生組合（同郷人会など）があり、秘密結社のように徒党を組んでいた。この集団は粗暴で、ささいなことで決闘をした。フィヒテはこうした学生組合を解散させ、決闘を止めさせようとした。しかし、これがもとで学生と対立した。当時の大学生の乱暴な生活については、私のハイデルベルク編の「学生牢」の項を読んでいただければ、よく理解できるだろう。

学生の一部はフィヒテに敵意を持つようになり、1795年にはフィヒテの家が襲われ、一時避難しなければならないほどだった。1795年の夏学期の講義は中止となり、冬学期より再開した。

フィヒテを襲ったトラブル その3 無神論論争

さらに、1798年、フィヒテが36歳の時に、「無神論者」として誹謗された。

フィヒテの弟子のフォールベルクが、「宗教の概念の発展」という論文を哲学雑誌に発表しようとした。フィヒテは、この論文を読んで、無神論だと感じたので、論旨を和らげるため、「神の世界支配に対するわれわれの信仰の根拠」という論文を書いた。その中で、フィヒテは、多くの点ではフォールベルクと同感だが、多くの点では反対だ、と書いた。しかし、匿名の攻撃文書によって、この前半の部分が強調されて、フィヒテは無神論者だと誹謗されることになった。

翌1799年、ザクセン政府（ドレスデンの宗教局）は、フィヒテとフォールベルクの双方をとがめ、雑誌を没収し、ワイマール政府に処罰を要求した。ワイマール政府は、譴責で穏便に処理しようとしたのだが、フィヒテは黙っておらず、当局に反駁した。「もし私を罷免するならば、私は大学を辞めるが、大学の同僚たちもいっしょに辞めるだろう」と宣言したのである。

イエナ大学を追い出される

フィヒテの態度があまりに硬直的だったので、ついに大学評議会は、フィヒテの辞職を認めざるをえなくなった。フィヒテをイエナに呼んだゲーテでさえも、フィヒテの罷免を主張したという。学生たちは、フィヒテのために署名運動をして嘆願したが、覆らなかった。

フィヒテは、自分の味方をした同僚もいっしょに辞めるだろうと予期していたが、いっしょに辞めた同僚はひとりもいなかった。いかにもフィヒテらしいエピソードである。

（ただし、少し後の1803年になって、ヴュルツブルク大学が新設されると、保守的なイエナ大学の雰囲気嫌って、後述のように、シェリングや、ニートハンマーやハインリヒ・パウルスといった有名教授がそちらに移った。）

こうして、1799年、37歳のフィヒテは、イエナ大学を追い出されたのである。

トラブルにあらわれたフィヒテのパーソナリティと哲学

3つのトラブルは、いずれも、受動的に何かのトラブルに巻き込まれたといったものではなく、逆に、フィヒテみずからの行動によって招いたものである。周囲との摩擦を恐れずに、自己主張を貫く強いパーソナリティが周囲から反発を買ったものである。フィヒテの周囲から反発を買ったものである。トラブルをおこしたのである。

大学といった平和な環境では、フィヒテの自己主張の強さや意志の強さがトラブルを引き起こし、鼻つまみ者になり、追放される。ところが、次に述べる反ナポレオン戦争における演説『ドイツ国民に告ぐ』では、フィヒテの命を賭けた自己主張が国民から熱狂的な支持を受ける。戦争という危機状況では、フィヒテの強いパーソナリティは英雄的な行為をもたらす。平和状況と危機状況では正反対の評価を受けるわけである。

こうした強いパーソナリティは、彼の哲学にもあらわれている。絶対的自我に向かって努力しなければならないという倫理的観念論、すなわち、何もかも運命によって決められているという決定論・因果論に逆らって「自由」を求める思想は、フィヒテのパーソナリティと一貫している。「人がどういう哲学を選ぶかは、その人がどういう人間であるかによっている」というフィヒテの言葉は、まさにみずからの哲学をあらわしている。

フィヒテとシェリングの関係

フィヒテが1799年にイエナを去ると、シェリングは、手のひらを返したように、フィヒテに冷たくするようになった。

1800年、新しい雑誌の構想をめぐり、シェリングと異なる見解を持った。

哲学上の考え方においても、ふたりの立場の違いが意識されるようになった。1800年に、シェリングは、『超越論的観念論の体系』を発表したが、これを読んだフィヒテは、はじめて、シェリングが自分の知識学の立場から逸脱していくのに気がついた。すぐにフィヒテはシェリングに手紙を書いて、先験哲学と自然哲学とを対立させることには同意できないと言った。その後文通が続くが、はじめの頃の手紙は、互いに相手を尊敬し、意見の調停に努めるという態度が保たれていた。しかし、しだいに論難するようになり、ついには感情的に対立した。

この往復書簡によって、2人はみずからの哲学的立場の違いを自覚するようになった。こうして1801年に、フィヒテは『知識学の叙述』を書き、一方、同年、シェリングは『わが哲学体系の叙述』を出版した。これでフィヒテとの差がいよいよ明らかになった。この1801年の『わが哲学体系の叙述』こそが、シェリングが同一哲学を打ち立てた記念碑的な著作とされる。

シェリングはヘーゲルをイエナに呼んで援護させた

フィヒテとシェリングが対立しはじめた1801年に、ヘーゲルがイエナ大学にやってきた。シェリングが、フィヒテとの対立の応援をさせるために、ヘーゲルを呼んだのである。

ヘーゲルがイエナで最初にしたことは、『フィヒテとシェリングの哲学大系の相違』（1801年）という論文を書いて、フィヒテを批判し、それによってシェリングに味方することであった。当時は、シェリングが無名の若者（ヘーゲル）を故郷から連れてきて、「シェリングはすでにフィヒテを超えている」ことを宣伝させたのだといわれた。

ヘーゲルは論文を発表していたわけではないし、大学教員としての経験もなかった。そんな若者がすぐに大学教員になれるわけではない。そこで頼った友人がシェリングであった。助教授だったシェリングのコネを利用して、イエナ大学にもぐりこもうとした。

シェリングとヘーゲルが組んでフィヒテを批判

1802年に、シェリングとヘーゲルは「哲学批判雑誌」という雑誌を出した。この雑誌は、シェリングとヘーゲルだけが執筆者であり、同人誌のようなものである。発表された論文には、署名がなかった。ヘーゲルはここに5本の論文を発表し、ここから学問的活動を始めた。この雑誌はフィヒテを批判したもので、フィヒテに送りつけられた。もちろん、シェリングにとっても、自説を肯定してくれるヘーゲルの存在は快かったであろうが、徳をしたのは、すでに有名だったシェリングよりも、無名だったヘーゲルのほうである。

シェリングはフィヒテと決別 2人の交流は終わった

1802年1月のシェリングからの手紙で、フィヒテとシェリングは決別した。以後、ふたりの交流はなくなった。

のちに1806年になって、ミュンヘンにいたシェリングは、『改良されたフィヒテ説の自然哲学に対する真の関係についての説明』を書いて、フィヒテとの決裂を公然と表明した。

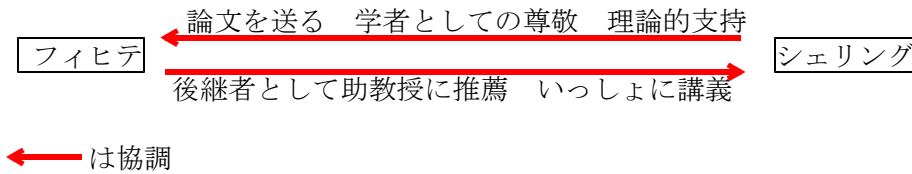
この論文に対して、フィヒテは、「知識学の概念ならびにその在来の運命に対する報告」を書いてシェリングを批判したが、生前は未発表であった。

以後、1814年にフィヒテが亡くなるまで、ふたりが交流することはなかった。

フィヒテとシェリングの師弟関係

ここでフィヒテとシェリングの師弟関係についてまとめておこう。

その始まりは、テュービンゲン大学において、19歳のシェリングがフィヒテの講演を聴いたことに始まる。

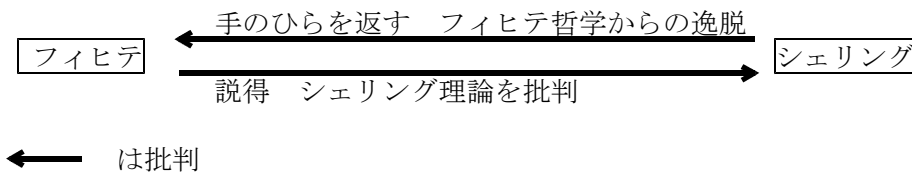


1794年、19歳のシェリングは、フィヒテの講演を聴き、また著作を読んで感動し、「哲学一般の形式の可能性について」という論文を書いて、フィヒテに送った。学者として尊敬していることを示し、フィヒテ理論を支持し、フィヒテの後継者たることをアピールした。1795年にシェリングは、『哲学の原理としての自我について』を出版し、フィヒテの学説を的確に解説し、この著作によってシェリングはドイツ観念論の哲学者として世に認められた。ちょうど、4年前の1791年、29歳のフィヒテがカントに対しておこなったのと同じアピールを、今度はフィヒテがシェリングから受けたわけである。

フィヒテも、尊敬を受けてうれしかっただろうし、シェリングを自分の後継者とみなした。そして、2人の間に往復書簡が始まった。そして、1798年に、フィヒテはシェリングをイエナ大学の助教授として呼んだ。フィヒテの時と同じく、ゲーテの推薦もあった。フィヒテは、はじめシェリングといっしょに講義もおこなった。

ただし、イエナ大学に就職した時点での哲学上の業績は、23歳のシェリングのほうが、32歳のフィヒテよりも圧倒的に上であった。若いシェリングは、たとえフィヒテに呼ばれなくても、他の大学からも引っ張りだことなったであろう。その意味では、若き実力者のシェリングを後継者として青田買いしたいというフィヒテの心理もあったかもしれない。ただ、23歳で大学助教授として呼ばれたシェリングの利益も大きく、得た利益は五分五分だったといえるだろう。

しかし、フィヒテがイエナを出ると、2人の関係は冷めたものになる。



シェリングは、手のひらを返したように、フィヒテに冷たくなる。哲学上の考え方においても、シェリングはフィヒテ哲学から逸脱していった。しだいにふたりの立場の違いが意識されるようになった。こうした過程も、フィヒテとカントの関係と同じである。

ここでシェリングの戦略として特徴的なのは、彼がヘーゲルを援軍としてイエナ大学に呼び、2人でタッグを組んで、フィヒテと戦ったことである。これは3人の間のバトルにおいて特徴的である。

一方、フィヒテは、初めは説得した。1800年のシェリングの『超越論的観念論の体系』を読んだフィヒテは、シェリングに手紙を書いて、逸脱しないように説得した。しかし、説得はうまくいかず、しだいに批判するようになった。往復書簡は感情的な対立に至る。この往復書簡によって、2人はみずからの哲学的立場の違いを自覚するようになった。さらに、1801年に、フィヒテは『知識学の叙述』を書き、同年、シェリングも『わが哲学体系の叙述』を出版し、互いの違いを明確にした。

1802年1月のシェリングからの手紙で、フィヒテとシェリングは決別した。以後、1814年にフィヒテが亡くなるまで、ふたりが交流することはなかった。

こうして、フィヒテとシェリングの師弟関係は崩れたのであるが、前述のカントとフィヒテの関係と同じである。ただし、フィヒテとシェリングは同じイエナ大学の同僚なので、余計にドロドロとしたものを感じられるようになった。こうしたドロドロした人間関係は、後述のシェリングとヘーゲルとの関係も同じである。

ベルリンへの移住

さて、1799年、37歳のフィヒテは、イェナを追い出され、ベルリンに向かった。ベルリンに就職の当てがあったわけではない。なぜベルリンにやってきたかという、フィヒテを罷免したザクセン政府やワイマル政府に比べると、プロイセンの政府がフィヒテに好意的だったからと言われる。

とはいえ、無神論者というレッテルを貼られたフィヒテは、ベルリンでも、はじめのうち当局の監視のもとに置かれた。しかし、プロイセンのフリードリヒ・ヴィルヘルム3世（前述）はベルリン滞在を許可した。

カントからの批判

1799年、カントがフィヒテの知識学を批判した。フィヒテがケーニヒスベルクのカントに会いに行った1791年には、カントはフィヒテに好意的になり、著書『あらゆる啓示の批判の試み』の出版を手伝った。1794年にフィヒテは『全知識学の基礎』を出版して、カント哲学の不統一を統一したと豪語した。

しかし、カントにとっては、それは「余計なお世話」であり、許されざる逸脱であったかもしれない。カントの「理性」を「自我」と置き換えたことに対して、カントは批判した。

1798年には、カントは以下のように述べて、フィヒテを批判した。「単なる自己意識、しかも素材を持たない、したがってまたこれに対する反省は適用さるべき何らの対象を持たず、それ自身は論理学をも超越するというような単なる思惟形式だけの自己意識は読者に奇妙な印象を与える。すでに表題（知識学という）を見ただけではほとんどその成果を期待することができない。なぜならすべて体系的に構成された学説はすなわち学だからである」（1798年ティーフトルク宛の手紙）、岩崎（1980）訳。

また、1799年に、カントは「フィヒテの知識学に関する声明 *Erklärung in Beziehung auf Fichtes Wissenschaftslehre*」を発表し、フィヒテの批判に対して反論し、フィヒテの「知識学」を「単なる論理学」にすぎないと切って捨てた。

フィヒテは、『一般学芸新報』でこれに答えた。

ベルリンでの浪人生活

ベルリンに移ったとき、就職の当てがあったわけではない。当時、ベルリンには大学がなかったので、哲学者たちは、自宅で、社会人を相手に有料の講義をして生活をしていた。フィヒテもそうしてお金を稼いだ。

フィヒテがベルリンにやってきた時、知り合いはフリードリヒ・シュレーゲル（シュレーゲル兄弟の弟）しかいなかった。彼を通して多くの学者・思想家と知り合った。シュレーゲル（兄）、シュライアマハー、ティークなどのロマン主義者たちである。また、古典主義のフンボルトとも知り合った。

◆当時のドイツの思想家

| 啓蒙主義 | 古典主義 | ロマン主義 | 観念論哲学 |
|------------------|---------------------|---|---|
| ニコライ メンデルスゾーン | ゲーテ シラー フンボルト | シュレーゲル兄弟 ティーク ジャン・パウル シュライアマハー | フィヒテ シェリング ヘーゲル ヤコービ ラインホルト |

ベルリンでの学問的活動

ベルリンでも、フィヒテは活発に出版活動を続けた。1800年には、『人間の使命』と『閉塞された商業国家』を発表した。この年に、新しい雑誌の創刊を構想したが、シェリングと異なる見解を持つことになった。

1801年には『最新の哲学の真の本質についての一般公衆に対する明快な報告』と『フリードリヒ・ニコライの生活と奇妙なる諸見解』を出版した。

この頃からは、著述は少なくなり、かわって講演を多く行うようになった。フィヒテがベルリンで初めて「知識学」を私的に講義したのは1801年であった。フィヒテは天性の演説家であり、説教家であったと言われる。私的講演は多くの聴衆も集め、メッテルニヒなどの著名人も聞きに来るようになった。講演のいくつかはそのまま出版された。

フィヒテの後期思想

ここで、フィヒテの後期思想をみておこう。後期思想とは、1799年にベルリンに移住してから1814年に亡くなるまでのフィヒテの哲学を示す。

「絶対的自我」の哲学から「絶対者」の哲学へ

イェナ時代のフィヒテは、カント流に「神」についての考察や議論を避けてした。カントは、「神は人間には認識できないものだから、哲学の対象ではない」として、ここから近代哲学が始まった。つまり、神の存在についての考察や議論をしない消極的無神論である。フィヒテもこの立場を取っていた。

しかし、前述のように、フィヒテの「絶対的自我」の考え方には、「超越論的統覚」という面と、「絶対者＝神」という二面性があった。表向きは「神」を避けながら、裏では「神」を取り入れていた。

これに対し、後期思想では「絶対者＝神」の哲学へと変わっていった。

無神論論争

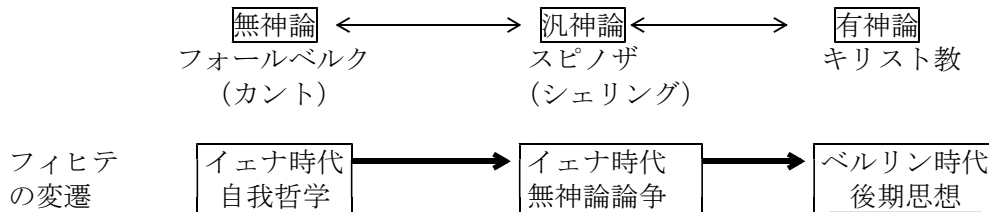
ひとつの大きな転換点は、1798年の無神論論争である。

前述のように、フィヒテの弟子のフォールベルクは、「宗教の概念の発展」という論文を哲学雑誌に発表しようとした。この論文は、カントの宗教論にもとづいて書かれたものであり、「宗教とは、正しい行いを導くという実践的な性質のものであって、神に対する信仰は必要ではない」という内容であった。つまり、消極的無神論である。

フィヒテは、これを読んで、無神論だと社会的影響が大きいと、論旨を和らげるため、「神の世界支配に対するわれわれの信仰の根拠」という論文を書いて、同時掲載した。その中で、フィヒテは、多くの点ではフォールベルクと一致するが、多くの点では不一致だとした。一致するのは、「宗教」というものが道徳的行為と結びつく点である。不一致なのは、フィヒテは道徳的行為には神への「信仰」が必要だと考える点である。つまり、フォールベルクは無神論の立場なのに対し、フィヒテは汎神論の立場である。

無神論・汎神論・有神論

無神論論争を下のような無視論・汎神論・有神論という系列で考えてみよう。



有神論とは、カトリック（一神論）のように、神の存在を認める立場である。

汎神論は、神はあらゆるものの根底に存在するとする立場で、スピノザの汎神論が有名である。

無神論は、神の存在を認めない立場である。フォールベルクも、神に対する「信仰」は必要ではないという立場であり、無神論である。フォールベルクが準拠したカントは、無神論というわけではないが、「神の世界は、人間には認識できないものだから、哲学の対象ではない」とした。つまり、神の存在についての考察や議論をしない消極的無神論である。実際に、カントの宗教論『単なる理性の限界内における宗教』は、1794年に、教会から有害とされて、カントは宗教・神学に関する講義や著作を禁じられてしまった。

フィヒテは、無神論→汎神論→有神論へと変化した

この図において、フィヒテの思想的を辿ると、無神論→汎神論→有神論と変遷していくのである。

フィヒテは、イェナ時代の自我哲学は、カントにならって、無神論に近かった。

しかし、イェナ時代の無神論論争においては、信仰の大切さを主張し、汎神論へと移動した。そこには、スピノザやシェリングの汎神論の影響があるとされる。

(ただし、シェリングもフィヒテと同じように、無神論→汎神論→有神論という思想的变化を示したので、ここでいう「シェリング汎神論」とは、イェナ時代のシェリングに限定される。)

このようなフィヒテの思想の変化は、カントの哲学を捨てたことになる。

1798年の無神論論争をこの図でみると、フィヒテは汎神論の立場にいた。だから、有神論（キリスト教）側からみると、フィヒテは左側に立っており、「無神論」だと非難された。たしかに「有神論」のような神の絶対性を認めない点では、無神論に近いかもしれない。

しかし、厳密にいうと、フィヒテの汎神論は、無神論ではない。神への信仰を認めるから、決して「無神論」というわけではない。カントのような無神論からみると、フィヒテは有神論に近づいたことになる。

このように、イェナ時代のフィヒテは、無神論と有神論の中間的な立場にいて、中途半端である。

ところが、1799年以降のベルリン時代の後期思想においては、フィヒテは完全に有神論へと移動することになる。

シェリングからの影響

フィヒテは、自我哲学からしだいに絶対者の哲学へと考え方を変えていく。そうした変化をもたらした要因のひとつは、弟子のシェリングの絶対者の哲学だったとも言われる。フィヒテは、シェリングの哲学は批判していたが、シェリングが提起した問題の意義を十分に認めて、それを解決しようとした。それによって、フィヒテの思想は、前期から後期へと変わっていった。

ベルリン時代の信仰哲学

フィヒテの後期思想の「有神論」は、1800年の著書『人間の使命』で明らかとなる。この書は、第1部「疑い」、第2部「知識」、第3部「信仰」という構成となっている。

第1部「疑い」では、因果論・決定論という自由のない世界が描かれる。カントの『純粹理性批判』の世界である。第2部「知識」は、「知識学（自我哲学）」つまり観念論の体系が描かれ自由を回復する。しかし、それでは世界の実在性はつかめない。第3部「信仰」では、世界の実在性（物自体の世界）を把握するのはただ信仰によってのみであることが明らかにされる。ここでは、「信仰」が「知識学（自我哲学）」よ

り上に来ている。こうした信仰の重視はイェナ時代の自我哲学にはなかったことである。こうした変化は、ヤコービの「信仰哲学」の影響を受けたといわれる。

こうした宗教的信仰の世界は、1801年『知識学の叙述』、1804年『知識学』、1806年『浄福な生への指教』など、年ごとに増していく。

エルランゲン大学教授

1805年に、43歳のフィヒテは、エアランゲン大学の教授として招かれた。夏学期だけエアランゲン大学で講義し、冬学期はベルリンで私的な講演をおこなうという約束だった。しかし、この大学の講義は半年間で終わった。

1806年、シェリングが『改良されたフィヒテの学説に対する自然哲学の真の関係の明示』を発表した。それに対し、フィヒテは、「知識学の概念ならびにその在来の運命に対する報告」を書いた（ただし生前は未発表）

ナポレオンとの戦争始まる

何もなければそのままエアランゲン大学教授として活躍しただろうが、そうならなかったのは、緊急事態がおこったからであった。というのは、1806年10月、プロイセンとナポレオン軍の戦争が始まったからである。

ナポレオンは、フランス革命をヨーロッパに拡大する名目で領土を広げたが、しかし、占領地からすればただの侵略にすぎない。1806年、ナポレオンはドイツの西部を占領し、「ライン同盟」という属国を作った。これによって、1000年続いた神聖ローマ帝国が解体した。東側に残ったプロイセン王国は、1806年にナポレオン軍に宣戦したが、イェナ・アウエルシュタットの会戦で、撃破されてしまう。しかも、ナポレオンはベルリンを占領した。

プロイセン政府は、ベルリンから逃げだし、ケーニヒスベルクに臨時政府を作った。ティルジットの和約により、領土を大きく失った。大国だったプロイセンは、西側をライン同盟、東側をワルシャワ大公国というナポレオンの属国に奪われてしまった。

エアランゲン大学教授だったフィヒテは、こうした国家の危機において、説教師として従軍したいと請願した。しかし、政府から受け入れられなかった。

1806年にベルリンが占領され政府がケーニヒスベルクに移ると、フィヒテは、ベルリンに妻子を残し、政府と共にケーニヒスベルクに避難した。こうした行動をみていると、よほどプロイセン政府への思い入れが強いというべきである。

ケーニヒスベルク大学教授でカントの後任となる

1807年には、臨時政府のあったケーニヒスベルク大学の教授に、フィヒテが任命された。

ケーニヒスベルク大学の教授だったカントが1804年に亡くなってから、その3年後に教授となった。フィヒテはついに、師であるカントの跡を継ぐことができたわけである。

ケーニヒスベルクからの占領直前の脱出→亡命→ベルリン帰還

しかし、ここでもフィヒテの講義は1学期だけで終わってしまった。なぜなら、ケーニヒスベルクがナポレオン軍に占領されてしまったからである。プロイセンは、国が滅びる危機におちいった。

フィヒテは、ケーニヒスベルク占領の3日前に脱出し、メーメル（現在はリトアニア領のクライペダ）に逃れ、コペンハーゲンに向かった。そこで、愛国心から、ナポレオン占領下のベルリンにひそかに帰還した。これには夫人の懇願もあったという。この時期のフィヒテは、まるでスパイ活劇の主人公のように派手である。

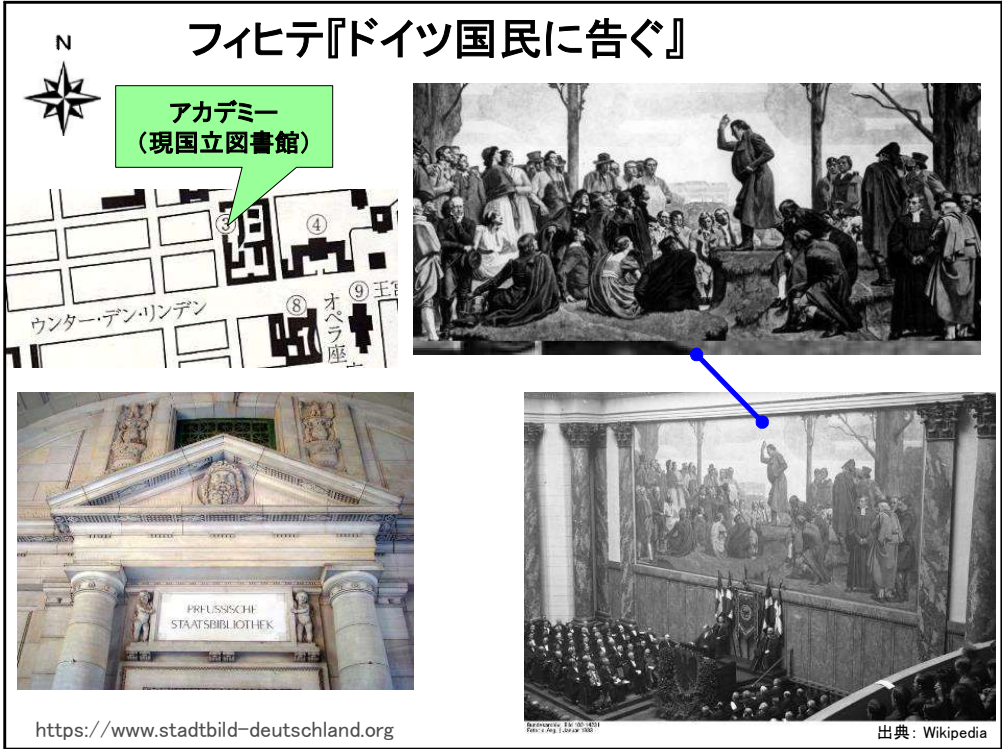
ベルリン大学開設の計画書

ナポレオン軍によって占領されていたプロイセンでは、宰相シュタインやハルデンベルクやバイメなど啓蒙主義の官僚によるプロイセン改革が始まっていた。前述のように、この頃からベルリンに高等教育機関を作ろうという教育改革が始まっていたのである。

1807年、ベルリンに戻ったフィヒテは、講演をはじめたが、その講演を聞いた官僚のバイメが、フィヒテに対して、ベルリン大学の創立の計画書を作るように依頼した。

すぐに、フィヒテは、大学教育の理念を構想し、「ベルリン大学開設に関する計画書」を提出した。しかし、依頼者のバイメが失脚したために、フィヒテの計画書は陽の目をみることもなかった。前述のように、バイメにかわってベルリン大学創設の責任者となったのがフンボルトであり、黒幕はシュライアマハーであった。

「ドイツ国民に告ぐ」



1807年に、フイヒテは、命がけでドイツ国民に愛国心を訴えた。これが有名な「ドイツ国民に告ぐ」Rede an die deutsche Nationという連続講演である。右上の絵（アルトゥール・カンプ作）は、ベルリン大学の講堂の壁画であるが、ここではフイヒテは広場で群衆に向けて演説をおこなっている。しかし、実際には、ベルリン科学アカデミーの「円形ホール」で行われた（左下の写真）。今の国立図書館の場所にあった。フイヒテはドイツ国民に訴えた。今のドイツには、利己的な心理に凝り固まっており、これがナポレオン軍の侵入を許した。若い頃心酔したフランス革命であるが、ナポレオンは革命の精神を踏みにじった。ドイツは、外国の支配に安住するか、抵抗するか。この屈辱を克服するには新しい教育によらなければならない。この新しい教育は、ペスタロッチの方法によって、主体的な精神を重んじなければならない。こうした教育によって真にドイツ国民の共同意識が目覚めたとき、はじめてドイツ国民は失われた独立を回復するだろう。こうした反ナポレオン思想を述べることは、当時は命がけのことであり、実際にナポレオンを批判して処刑された人もいた。この命をかけたフイヒテの愛国的な講演はドイツ中の若者を熱狂させた。

ベルリン大学教授となる

バイメの後を継いだフォンボルトとシュライアマハーによって、1810年、ベルリン大学が創設された。48歳のフイヒテは、できたばかりのベルリン大学の教授として招かれた。そして、哲学部の学部長となった。命がけの講演「ドイツ国民に告ぐ」と、哲学者には珍しい政治的行動力がプロイセン政府から評価されたからであろう。

ベルリン大学学長となる

翌1811年には、ベルリン大学学長は初めて選挙で決められることになり、この選挙でフイヒテが学長に選ばれた。よく「フイヒテはベルリン大学の初代学長」と呼ばれるが、厳密にはこれは誤りであり、「選挙で選ばれた初代学長」つまり「初代の公選学長」というのが正しい。

◆ベルリン大学学長

| 代 | | 在位 | 名前 | 専門 |
|----|------|----------|---|-----|
| 1 | 初代 | 1810～11年 | シュマルツ Theodor Schmalz | 法学 |
| 2 | 公選初代 | 1811～12年 | フイヒテ Johann Gottlieb Fichte | 哲学 |
| 3 | 公選2代 | 1812～13年 | ザヴィニー Friedrich Karl von Savigny | 法学 |
| 4 | | 1813～14年 | ルドルフィ Karl Asmund Rudolphi | 医学 |
| 5 | | 1814～15年 | ゾルガー Karl Wilhelm Ferdinand Solger | 哲学 |
| 6 | | 1815～16年 | シュライアマハー Friedrich Ernst Schleiermacher | 神学 |
| 7 | | 1816～17年 | リンク Heinrich Friedrich Link | 生物学 |
| 18 | | 1829～30年 | ヘーゲル Georg Wilhelm Friedrich Hegel | 哲学 |

フィヒテ学長の管理主義宣言

フィヒテは学長就任に当たって、「大学の自由を妨げるただひとつの可能性について」という演説をおこなった（翌年出版）。

これはなかなか現実的な演説である。ベルリン大学には大学の自由を保証するが、その「大学の自由」を妨げるものこそ、大学生の乱暴行為である。大学生と称して、大学に乗り込んでくるならず者集団がいる。自由をいいことに、勉学もせず、酒を飲んで大暴れし、やたらに決闘ばかりする。決闘で命を落とす者が戦争中よりも多いのは何たることか。それを大学が取り締まろうとすると、ストライキをおこして、集団退去して、町に迷惑をかける。彼らは与太者集団である。学生が大学に対して脅しがきくと思ったら大間違いである。ベルリン大学はならず者をビシビシ取り締まる、とフィヒテはいう。管理主義宣言である。

学長が説教しなければならないほど、当時の学生組合はひどく粗暴で独善的な集団であった。

昔、フィヒテは、イェナ大学時代に、粗暴な学生組合（同郷人会）を解散させようとして、学生から恨まれた。ベルリン大学でも同じように、フィヒテは学生組合を禁止しようとして、学生組合から恨まれた。

フィヒテとシュライアマハーの対立→学長の辞任

フィヒテは、学生たちの決闘や乱暴行為（下級生いじめのペンナリズム）や、独善的な学生組合について、「大学の自由」を妨げるものとして否定した。

これに対し、神学部長シュライアマハーは、学生組合に対しては妥協的な態度をとっていたので、フィヒテと対立することになった。

案の定、学生たちはケンカをして、大学当局から処罰を受けた。これに対して学生組合はフィヒテを恨み、これに教員集団も巻き込まれ、フィヒテ派とシュライアマハー派に二分された。シュライアマハーは、フィヒテの講義と同じ時間帯に自分の講義時間をぶつけたという。

1812年、業を煮やしたフィヒテは、ついに学長を辞任せざるを得なくなった。後任はザヴィニーという法学者であった。

ベルリン大学での講義

フィヒテは教授として哲学に打ち込むことができるようになった。フィヒテがベルリン大学でおこなった講義は、「意識の事実」「知識学」「超越論的論理学」「法律論」「道徳論」であった。フィヒテの聴講生としてショーペンハウアーがいる。

再びナポレオンとの戦争が始まった

1813年に、プロイセンはナポレオン軍に宣戦し、戦争が始まった。フィヒテは、国境守備隊に入ろうとするが、断られた。フィヒテの代わりに、夫人ヨアンナが篤志看護師として働いた。

フィヒテの死

ナポレオンとの戦争で、フィヒテのかわりに篤志看護師として働いた妻は、1814年に、兵士のチフスに感染してしまった。

その後、妻は回復したのだが、今度はフィヒテが感染した。そして、フィヒテはあっけなく死亡してしまった。戦争の犠牲者として死んだといえる。享年52。これから哲学者として活躍するという年齢である。

後述のように、フィヒテ夫妻の墓は、ドロテーエンシュタット墓地において、ヘーゲル夫妻の墓と並んで立っている。

ヨアンナ夫人の死

フィヒテの死から5年後の1819年に、夫人のヨハンナも亡くなった。

フィヒテは、シェリングやヘーゲルと違って、女性関係はまじめで、ひとりの女性ヨアンナと添い遂げた。コペンハーゲンに亡命中のフィヒテをベルリンに呼び戻したのはヨアンナの懇願である。フィヒテの死は、チフスにかかった妻ヨハンナを看病したために、感染したからである。フィヒテとヨハンナは、ベルリンの墓地でいっしょに眠っている。

フィヒテは、本論に出てくる学者の中では、最もまじめで、女性に対して最も誠実であり、少し安心する。

ナポレオンとの戦いで戦死したフィヒテ

フィヒテの人生で特筆すべきことは、ナポレオンとの戦いに命を賭けたことである。

フィヒテがケーニヒスベルク大学に行ったのは、プロイセンがナポレオン軍に占領されて、プロイセン臨時政府がケーニヒスベルクに作られたからである。

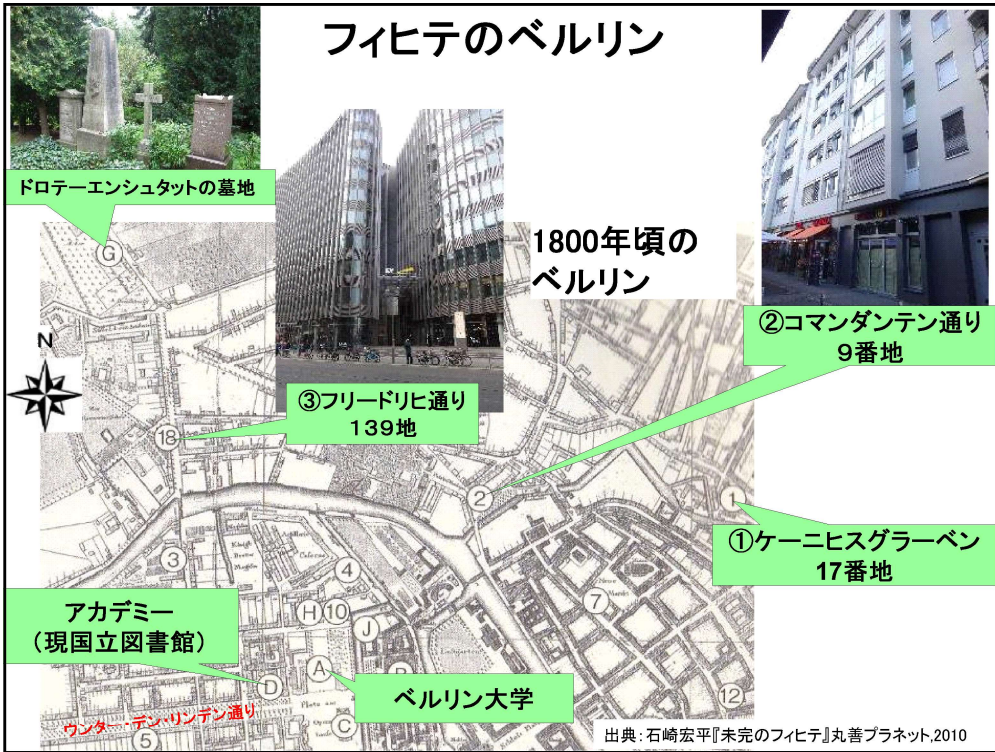
また、フィヒテは、ナポレオン軍占領下のベルリンで、命をかけて講演『ドイツ国民に告ぐ』をおこない、ドイツ国民に愛国心を訴えた。ここで、軍に捉えられて殺されてもおかしくなかった。実際にナポレオンを批判して処刑された人もいたのである。

1813年に、プロイセンはナポレオン軍に宣戦し、戦争が始まると、フィヒテは、大学教授という身分にもかかわらず、国境守備隊に入ろうとした。もし志願が許されていたら、そこで戦死しておかしくなかった。

しかし、志願が断られたので、フィヒテの代わりに、夫人ヨアンナが篤志看護師として働いた。そして、兵士からヨアンナにうつったチフスが、フィヒテに感染し、彼の命を奪うことになった。

こうしてみると、フィヒテの死は、結果的には、ナポレオンとの戦いにおける戦死といっても過言ではない。

フィヒテのベルリン



ベルリンに残るフィヒテゆかりの地を巡ってみよう。

『ドイツ国民に告ぐ』の講演をおこなったアカデミー（現国立図書館）と、初代学長をつとめたベルリン大学についてはすでに述べた。

フィヒテの住居は以下の3つである。

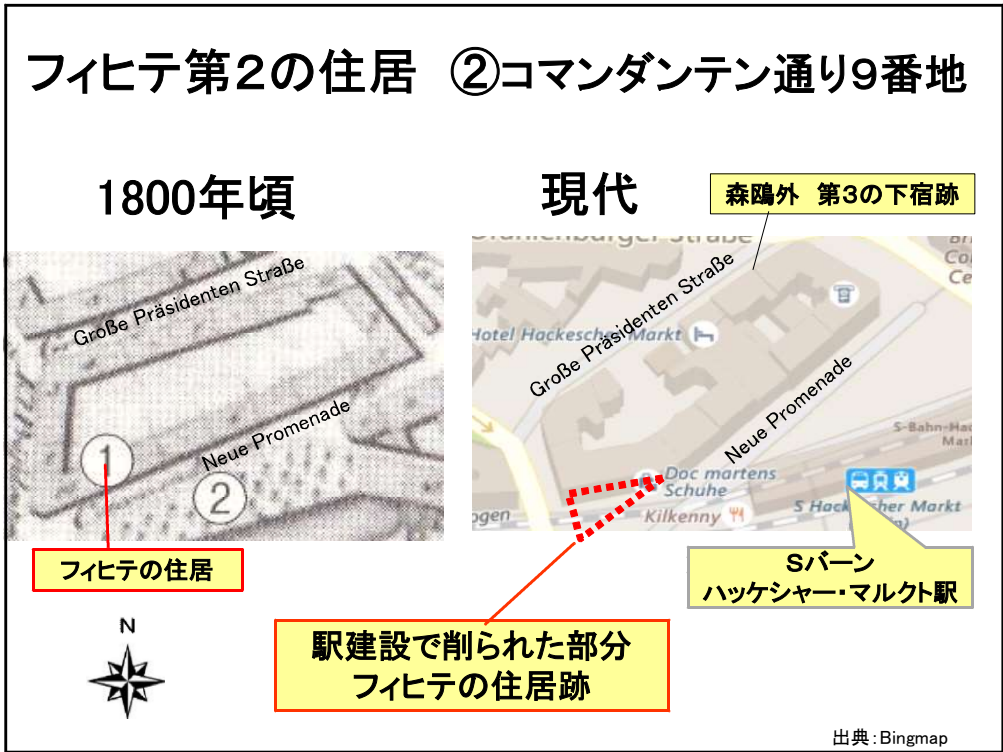
◆フィヒテのベルリンでの住居

| | 当時の住所 | 住んだ時期 | 現在 |
|---|-----------------|------------|----------------------------------|
| ① | ケーニヒスグラーベン 17番地 | 1800～1803年 | 区画整理で通りはない |
| ② | コマンダンテン通り 9番地 | 1803～1805年 | ノイエ・プロムナーデ10番地 (この部分の建物は削られた) |
| ③ | フリードリヒ通り 139番地 | 1807～1814年 | 番地は存在するが、商業ビルが建っている |

フィヒテ第1の住居 ①ケーニヒスグラーベン 17番地

フィヒテが1800～1803年に住んだ住居である。ここでベルリン最初の講義をおこなった。

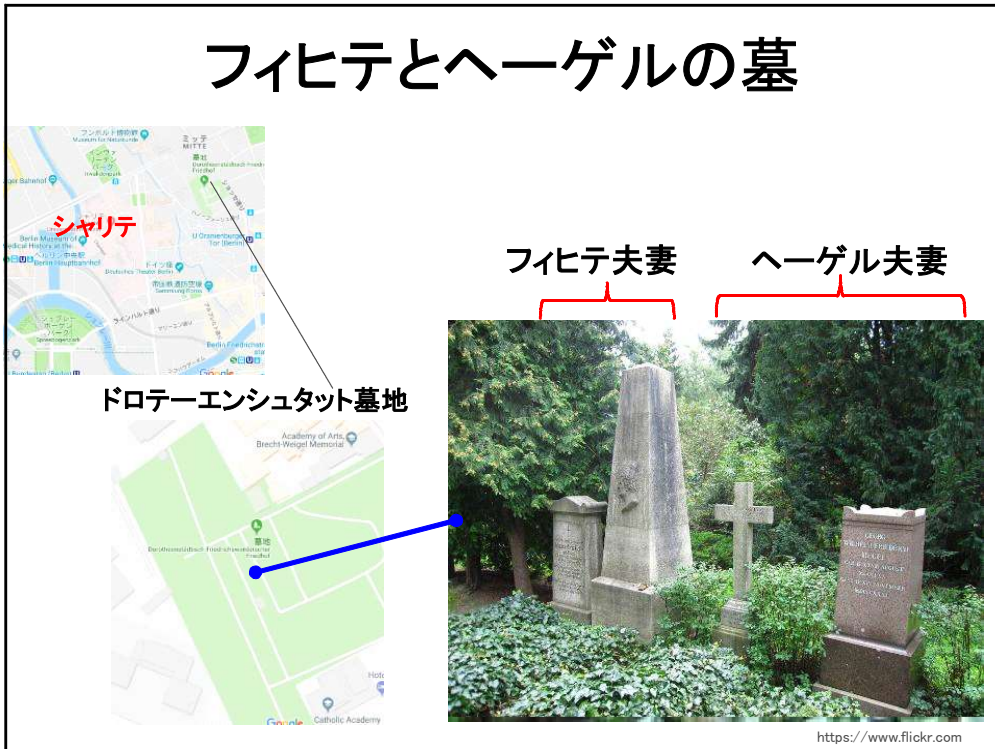
現在は、区画整理によって、このあたりの区割りは完全に変わっている。



1803～1805年まで住んだのが、コマンダンテン通り9番地である。
現在は、ノイエ・プロムナーデ10番地となっている。ノイエ・プロムナーデ10番地この番地の表示を探してみたが、8番地は表示されているが、10番地の表示はなかった。石崎宏平『未完のフィヒテ』によると、1862年にフィヒテについての記念板が作られたが、ハッケシャーマルクト駅が作られて、この部分が削られたので、記念板もなくなったらしい。
1800年頃の地図（左の図）をみると、確かに、このブロックの西南部分は尖った形をしている。しかし、現在の地図（右の図）では、西南の部分が削られたような形をしていることがわかる。この部分は、ハッケシャーマルクト駅を作るときに削られたのだろう。
なお、同じブロックには、森鷗外が1888年にいた第3の下宿がある。フィヒテの時代から80年後のことである。

フィヒテ第3の住居 ③フリードリヒ通り 139番地

フィヒテが1807～1814年にいた住居跡である。ここでフィヒテは最後を迎えた。
現在は、大きな商業ビルが建っており、当時の面影は全くない。
なお、フィヒテの妻子は、1805～1807年まで、レツテン通り（ドロテーエン通り3番地）に住んだという。



フィヒテ夫妻は、ドロテーエンシュタット墓地に埋葬された。この墓地は、シャルリテから歩いて行ける。この墓地には多くの著名人の墓がある。宇佐美『ベルリン文学地図』250頁には、有名人の墓の位置が解説されている。

写真に示すように、フィヒテ夫妻の墓は並んでいるが、その隣にヘーゲル夫妻の墓石が並んで立っている。宇佐美幸彦『ベルリン文学地図』関西大学出版部、2008

<参考文献>

- 福吉勝男『フィヒテ 人と思想』清水書院、1990。
石崎宏平『未完のフィヒテ：激動のベルリンを舞台にした一哲学者の「生」のドラマ』丸善プラネット、2010。
岩崎武雄「フィヒテとシェリングの生涯と思想」『世界の名著 続9 フィヒテ シェリング』中央公論社、1974。
ハルトマン（村岡ほか訳）『ドイツ観念論の哲学 第1部 フィヒテ、シェリング、ロマン主義』作品社、2004。
潮木守一『フンボルト理念の終焉？ 現代大学の新たな次元』東信堂、2010。
宇佐美幸彦『ベルリン文学地図』関西大学出版部、2008
谷克二『図説ベルリン』河出書房新社
山崎正一・原佑・井上忠『西洋哲学史』東京大学出版会、1965。
丹野義彦『ロンドンこころの臨床ツアー』星和書店 2008
丹野義彦『イギリスこころの臨床ツアー 大学と精神医学・心理学臨床施設を歩く』星和書店 2012
丹野義彦『アメリカこころの臨床ツアー アメリカ：精神医学・心理学臨床施設の紹介』星和書店 2010
丹野義彦『イタリア・アカデミックな歩きかた』有斐閣、2015年
丹野義彦『レム論 あるいはレムのSFはどこがすごいのか』 <http://tannoy.sakura.ne.jp/>

●元のページに戻る

<http://tannoy.sakura.ne.jp/>